志賀原発トラブル続出

いまだ被害の全容も定かでない能登半島巨大地震であるが、原発リスクにも目を向けたい。「志賀原発トラブル続出」（毎日新聞 13 日朝刊）も重要な検証事項であり、記事を抜粋して紹介する。

北陸電力志賀原発（石川県志賀町、停止中）で、能登半島地震によるトラブルが相次いだ。安全上重大な影響はなかったが、揺れの一部が想定を上回ったことも判明。今回の地震や津波の全容はつかめておらず、北陸電が再稼働を目指す２号機の安全審査は、長期化が不可避となっている。

原子力規制委員会が疑問視したのは、比較的揺れが小さかった発電所内でトラブルが起きたことだ。1 日の地震で、志賀町では震度 7 を観測したものの、志賀原発の敷地では震度 5 強だった。

しかしこの揺れで、外部電源から電力を受ける変圧器が 1、2 号機とも破損。約 2 万 3400 ㍑もの油が漏れた。外部電源の一部が途絶えたままで、全面復旧には半年超かかる見通しだ。

変圧器は、2007 年の新潟県中越沖地震で東京電力柏崎刈羽原発でも故障し火災が起きた。東電福島第一原発事故では、すべての電源が失われ過酷事故を招いた。原発の新規制基準では、変圧器に要求される耐震性能は、3 段階あるクラスで最も低い。だが事態を重く見た規制委は、北陸電に原因究明を求めると決めた。

トラブルに輪をかけたのが、情報が二転三転したことだ。北陸電は地震発生時、変圧器で自動消火設備が作動し、運転員が焦げのような臭いと爆発音を確認したと規制委に報告した。林芳正官房長官はこれを受け「変圧器で火災が発生した」と発表した。しかし北陸電は翌 2 日、火災はなかったと訂正。運転員が、油のにおいを焦げ臭いと誤認し、変圧器内部の圧力を下げる板が作動した音を、爆発音と間違えていた。

敷地に到達した津波についても、当初「水位計に有意な変動はみられなかった」と説明したが、その後、高さ 1〜3 ㍍の津波が複数回到達したと訂正した。漏れた油の量も 2 号機で当初約３５00 ㍑と発表したが、実際の漏出量は 5 倍超の 1 万 9800 ㍑に上った。さらに、油は全て建物内にとどまっているといったん説明したにもかかわらず、一部が海に漏れ出ていたことも後に明らかになった。

北陸電は「社内の情報共有が不十分だった。信頼を損なわないよう正しい情報発信を徹底する」と釈明。経済産業省は北陸電に対し、正確で丁寧な説明を徹底するよう指導した。「緊急時の情報発信は福島第一原発事故の大きな教訓。やはり不十分なところがあった」。規制委の山中伸介委員長は 10 日の記者会見で、こう苦言を呈した。

日本海側には 7 つの原発が立地しており、徹底した点検と検証が求められる。

（2024 年 1 月 19 日）